「明海日本語」第18号　増刊（2013.11）

〈論　　文〉

「じゃね？」の使用意識と先行部の平板化

―栃木県の若年層に対するアンケートを中心に―

Usage of Sentence-final Expression "*ja-ne*" and Flattening of Preceding Phrases
―Questionnaire to Younger Age Groups in Tochigi ―

高丸　圭一（宇都宮共和大学）

キーワード　平板化，「じゃね」，若年層，共通語化，無アクセント

要　旨

本論文では，先行部に平板化を伴う「じゃね？」について，使用意識，使用実態と音声的実現の経年変化について分析した。使用意識についての質問では「じゃね？」は「身近にいるチャラい若い男性」が使う表現であるという使用者像が浮かび上がったが，若年層における自分自身の使用率は，性別，調査年，居住地にかかわらず80%前後と高かった。また，この表現は2004～2005年から使う人が増え始め，2009～2010年にはほぼ飽和に近づいた。現在では若年層の誰もが使用し得る表現である。先行部の平板化の範囲については，先行部が2文節の文では，直前の1文節のみの平板化と2文節すべての平板化の割合はほぼ同等であった。しかし，より長い文を連続的に平板化する発音を選んだ回答者は少なく，この場合平板化させない発音を選ぶ割合が高かった。

Abstract

In this paper, a sentence-end expression "*ja-ne"* which is preceded by flattened phrases is analyzed in terms of awareness and actual usage. Young people are aware that the expression is used by mischievous young men close to them. However 80% of them use the expression regardless of distinction of sex investigation place or investigation year according to the question about status of use. The number of user increased from around 2004 or 2005. It is close to saturation almost between 2009 and 2010. Then "*ja-ne*" turned into an expression which everyone in the younger age group uses. Two kind of tendencies are observed in the investigation of the range of flattening: (i) When the preceding portion has two phrases, the ratio of the flattening of all two phrases and flattening of only one phrase is almost equal. (ii) When the preceding portion has more than two phrases, the ratio of the flattening of long phrases is low, and the ratio of un-flattened utterance increases.

1　はじめに

無アクセント地域では，共通語アクセントの獲得が進んでいる。一方，アクセントの消失（平板化）に関連する現象も観察される（木部 2007，儀利古 2011など)。新方言「～じゃね？」においても，先行する語の平板化が指摘されている（井上 2008a, b)。「じゃね？」先行部ではアクセントが消失し，「飴じゃね？」と「雨じゃね？」を同一のピッチパタンで発音する。田中（2009）は，先行部の平板化を伴う「～じゃね？」は「～ない？」の「～」の部分でアクセントが消失するいわゆる「とびはね音調」の文末の音訛（/nai/→/ne/）であると説明している。高丸(2010)では，栃木県居住の若年層と東京近郊若年層，栃木県居住の成人層をそれぞれ比較し，「じゃね？」先行部の平板化について調査した。「じゃね？」に頭高名詞＋頭高動詞が先行した「雨降んじゃね？」では，「雨」は有核のままで「降ん」を平板化した音声を選んだ者が有意に多いこと，「雨」「降ん」の両方を平板に発音する音声は無アクセント話者に多く選ばれていることなどが明らかになった。また，収録調査から共通語アクセントを獲得した無アクセント地域の若年層話者が，首都圏の若年層と同様に平板の発音を取り入れ，無アクセント→共通語アクセント獲得→アクセントの平板化という変遷の過程が明らかになった。

本稿では，高丸(2010)以降に行った「じゃね？」の使用と先行部の平板化についての調査を扱う。特に，2010年から2012年までにかけて同一の高等学校に対して実施した調査を中心に分析を進める。2章では調査対象と調査項目について述べる。3章でアクセントの弁別能力について述べる。その上で，4章で「じゃね？」という表現をいつ頃使いはじめたか（もしくは聞くようになったか）の使用意識について，5章で「じゃね？」先行部の平板化の範囲について，それぞれ回答者の属性に基づく傾向について考察する。

2　調査の概要

「じゃね？」の使用と先行部の平板化の実態を明らかにするために行った調査の「調査時期」「調査対象」「回答者数」「調査項目」を表1に示す。「コード」は調査を区別するために用いる。コードのアルファベット3文字は組織（学校）の別を，数字2桁は調査年度を表す。調査時期が2つ併記されているものは，同一の学校を対象としてクラス別に異なる時期に調査したことを意味する。いずれの調査も回答者を大教室等に一同に集め，質問紙を用いて調査した。アクセントの弁別と平板化の範囲については，教室の音響設備等を用いて一斉に音声を提示する方法で調査を行った。調査項目ごとの具体的な方法は次章以降で述べる。

表1　調査の概要

コード	調査時期	調査対象	回答者数	調査項目		
				アクセント	使用意識	平板化の範囲
UTF09	2009.06 2009.10	宇都宮市内の私立高校(高校1年生)	415	○[A]	×	○[C]
NAS09	2009.10	那須塩原市民講座受講者(成人層)	48	○[A]	×	○[C]
SIZ09	2009.12	静岡市内の国立大学(大学生)	15	○[A]	×	○[C]
MOJ10	2010.06	真岡市内の県立女子高校(高校2年生)	29	○[B]	○	○[D]
UTF10	2010.06 2010.10	宇都宮市内の私立高校(高校1年生)	369	△[B]	○	○[D]
YOK10	2010.07	横浜市内の国立大学(大学院生)	4	○[B]	○	○[D]
UKU10	2010.07	宇都宮市内の私立大学(大学生)	35	○[B]	○	○[D]
OTR10	2010.07	小樽市内の国立大学(大学生)	84	○[B]	○	○[D]
UUE10	2010.07	宇都宮市内の国立大学(大学生)	73	○[B]	○	○[D]
UTF11	2011.04	宇都宮市内の私立高校(高校1年生)	160	×	○	○[D]
UTF12	2012.06	宇都宮市内の私立高校(高校1年生)	339	×	○	○[D]

3　アクセントの弁別

単語アクセントの弁別実験を表1の「アクセント」列に「○」を記した調査において実施した。「○[A]」は音声を提示して「箸vs橋」「雨vs飴」を弁別する調査である。「○[B]」は「雨vs飴」「紙vs神」「自動vs児童」を弁別する調査である。提示した音声はいずれもNHKアクセント辞典CD-ROM版(NHK放送文化研究所2002)に収録されたアナウンサーによる発音である。「△[B]」のUTF10は2010年6月と10月の2回の調査のうち前者1回のみでアクセント調査を行った。アクセント弁別実験における共通語アクセントとの一致率を図1に示す。

NAS09（那須塩原の成人層）の共通語アクセントとの一致率は50%前後であり，無アクセント方言話者の特徴が表れている。一方，若年層（高校生，大学生）を対象とした調査では，無アクセント地域であるかどうかに関わらず，概ね90%以上が共通語アクセント通りの選択をしている。SIZ09（静岡市の大学生）の「橋」とUKU10（宇都宮市の大学生）の「雨」では，共通語アクセントとの一致が70%を下回った。前者では，「橋」について「どちらでもない」とする回答が約30%存在し，その中に（提示した音声は）「端」ではないかというコメントが記されていたものがあった（単語単独の発音では「橋」と「端」はアクセントによる区別はできない)。後者では「雨」の音声を「どちらでもない」とする回答が約23%存在した。「アメ」には選択肢として提示した「雨」「飴」以外に日常的に使われる同音異義語がないため，何を想定して「どちらでもない」が選ばれたかは本調査の範囲では分からない。

無アクセント方言話者は，異なるピッチパタンの音声（例えば「雨」と「飴」の2種類の音声）を聞いたときに意味の区別をしないだけでなく，その2つの音声のどこが違うのか分からないという反応を示すことがある。本調査の結果，無アクセント地域の若年層は共通語アクセントを弁別する能力を有しているといえる。音声を提示して行う「じゃね？」先行部の平板化の調査においても，提示音声のアクセントの有無を区別して聴取することが可能であると考えられる。

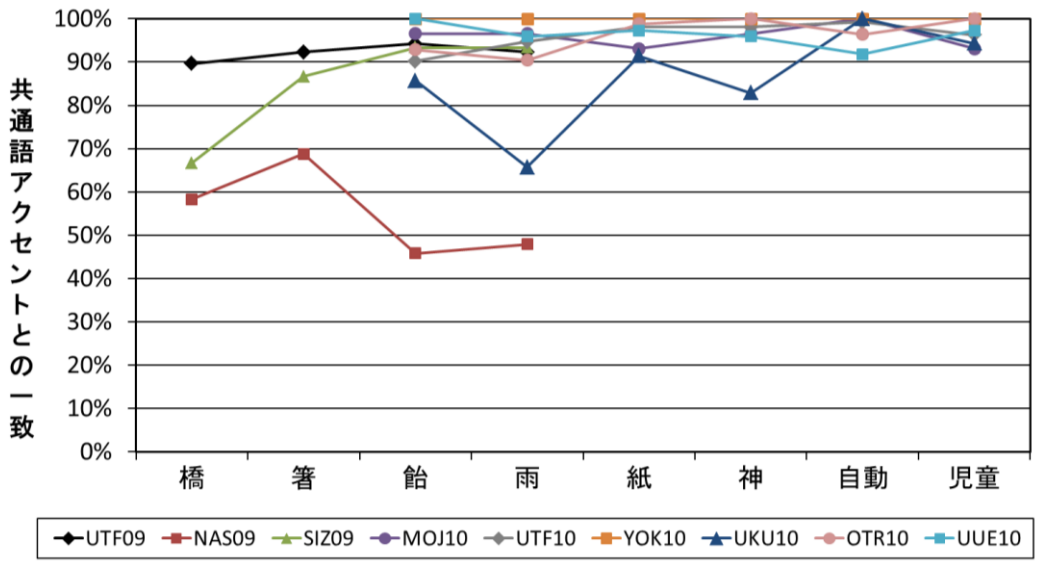


図1　アクセント弁別調査の結果

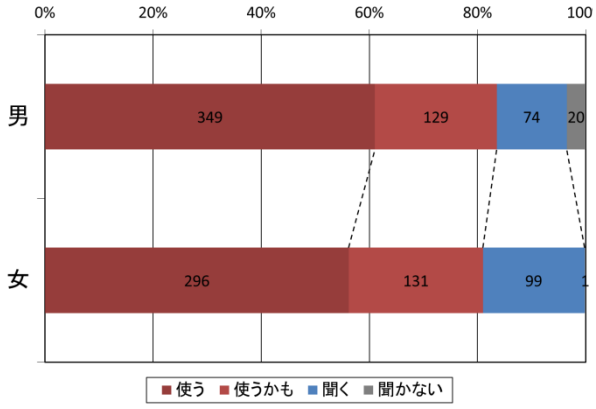
4　「じゃね？」の使用意識

表1の調査項目「使用意識」に「○」を記した調査対象に「じゃね？」という言い方を「使う」「使うかもしれない」「使わないが聞くことがある」「聞いたことがない」について強制選択式で質問をした。「使う」「使うかもしれない」と答えた人には「いつ頃から使うか」を自由記述式で，「聞くことがある」と答えた人には「いつ頃から聞くか」と「誰から聞くか」を自由記述式で質問した。回答者がこれらの質問に正確な記憶に基づいて答えることは困難であると考えられるため，使用実態ではなく使用意識を問う設問として位置づける。また，この質問では，自分では使っていないつもりでも，実は使っているということが予想される。そこで「使う」と「使わないが聞く」の間に「使うかもしれない」という選択肢を用意し，使用について振り返りやすくした。

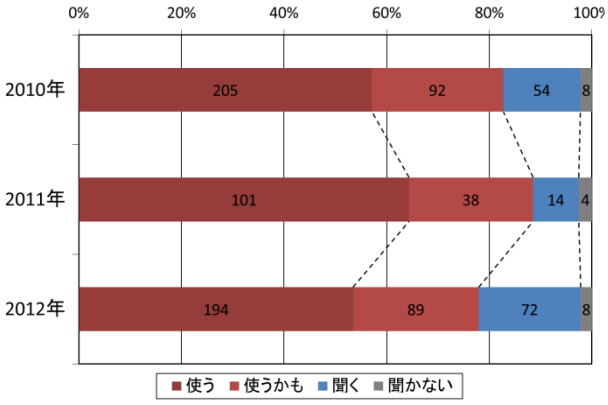
調査を行った全グループの合計では，「使う」と「使うかもしれない」があわせて82%，「聞くことがある」が16%，「聞かない」が2%であった。このことから「じゃね？」は広く使用される表現であることが分かる。以下では，宇都宮市内の私立高校1年生を対象に3年間にわたって調査したUTF10，UTF11，UTF12の結果について詳しくみる。

4.1　回答者の属性と使用意識

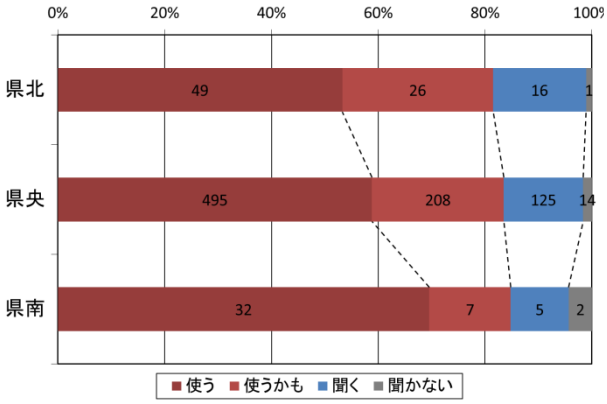
UTF10，11，12グループの回答者における「じゃね？」の使用意識（自分が使っているかどうか）について，男女別，回答年度別，居住地別に集計した結果を図2(a)〜(c)に示す。また，使用意識と回答者の属性との関係についてカイ2乗検定を行った結果を併せて示す。検定にはRのchisq.test関数を用いた。



(a) 男女別



(b) 調査年度別



(c) 居住地別（栃木県内）

(a)
男—女　$p=3.381\times10^{-5}(<0.05)$　*

(b)
2010—2011　$p=0.2399$
2011—2012　$p=0.0166(<0.05)$　*
2010—2012　$p=0.4069$

(c)
県北—県央　$p=0.7099$
県央—県南　$p=0.1059$
県北—県南　$p=0.1152$

カイ2乗検定の結果

図2　「じゃね？」を使っているか／聞くか（UTF10，11，12）

男女別では，女性より男性の方が「使う」という回答が多いが，女性も「使う」と「使うかもしれない」を合わせた使用率は約80%であり，性別を問わず使用する表現であることが分かる。男女の別についてはカイ2乗検定のp値が$p<0.05$であり，性別によって使用意識に有意差が認められる。残差分析の結果，有意差に寄与する項目は「聞く」（女が有意に多い）と「聞かない」（男が有意に多い）であり，使用については男女差がないといえる。

調査年度別では，2010年度から2011年度にかけては「使う」と回答した割合が増加したが，2011年度から2012年度では減少に転じている。ある程度広く普及した新しい表現の使用意識の衰退には2つの側面が考えられる。一つはその表現がごく日常的なものとなり，自分自身が実際に使用しているかどうかを振り返っても思い出しづらい可能性である。もう一つは若者の流行りことばとしての新鮮みがなくなり，実際に使用する者が減少しつつある可能性である。新しい表現を獲得して使い続ける層と，流行表現として一時的に使用し次第に使用しなくなる層に分かれることが予想されるため，このことは今後の継続調査にて明らかにしたい。なお，カイ2乗検定の結果は2011年と2012年の間について有意差が認められる。残差分析の結果，2011年は「使う」が有意に多く，

2012年は「聞く」が有意に多い。

居住地別では，栃木県内を県北部，県央部，県南部の3つに分類したところ，県北＜県央＜県南の順に使用していると回答した人が多くなった。首都圏から近い場所に居住する人ほど「じゃね？」を使用する傾向がみられる。ただし，カイ2乗検定の結果では，居住地について有意差は認められない。

4.2　誰から聞くか

「じゃね？」を「使わないが聞く」と答えた回答者に「どういう相手から聞くか」を自由記述形式で質問した。全回答文（271文）を予備的に分類し，「友達系」「若者系」「年上系」「男」「女」「チャラい系」「メディア」「その他」の8項目で集計した。例えば「若い男性」という回答は「男」と「若者系」に，「チャラ男（お）」という回答は「チャラい系」と「男」に属するものとして集計する。集計結果を表2に示す。

表2　「じゃね？」をどういう相手から聞くか

友達系	若者系	年上系	男	女	チャラい系	メディア	その他
197(72.7%)	41(15.1%)	4(1.5%)	20(7.4%)	8(3.0%)	13(4.8%)	4(1.4%)	19(7.0%)

友達系（「友人」「同級生」など）が72.7%と最も高く，ここからも「じゃね？」は日常的な会話の中で用いられることが分かる。年齢に関連する回答では，若者系（「同世代」「10代」「中高生」など）が15.1%だったのに対し，年上系（「先生」「両親」など）は約1/10の1.5%であった。また，性別に関連する回答では，「女」が3.0%であったのに対し「男」が7.4%であった。また，「チャラい系」（「チャラい」という文字を含む回答6件のほか「ヤンキーっぽい人」や「ギャル」といった回答もここに含めた）という回答が4.8%，「メディア」（「テレビ」や「ネットの書き込み」）という回答が1.4%見られた。この調査では選択肢を提示していないため，回答者が直感的に思い浮かべる「じゃね？」の使用者像を回答していると考えることができる。結果を見ると「身近にいるチャラい若い男性」（チャラい男友達）が「じゃね？」の典型的な使用者像といえる。

4.3　いつから使っているか（聞くか）

次に，「いつから使うか」および「いつから聞くか」の自由記述に基づいて，それぞれが西暦何年に相当するかを集計した。例えば，2010年の調査で高校1年生の回答者が「中学生1年生のときから使っている」と回答した場合には，使用開始時期は2007年となる。「中学生くらい」という幅のある回答の場合には，示す時期の中央である「中学2年生」が西暦何年かを求めた。「かなり前」など具体的な時期が特定できない回答は集計から除外した。図3に西暦何年頃から使う，または，聞くようになったかの累積割合を示す。

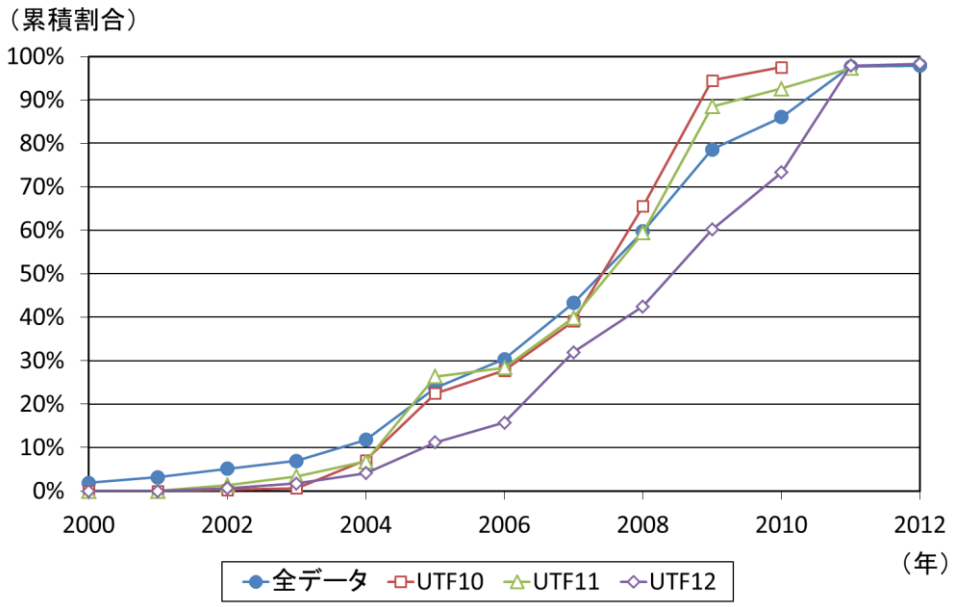


図3　「じゃね？」をいつから使っているか／聞くようになったか

全データの結果を見ると，2000年頃から使う／聞くと回答する人が出始め，2005年頃から急速に広まる。2007～2008年頃に50%を越え，2010～2011年にはほぼ飽和する。UTF10，UTF11においても，全データの結果とほぼ同様に推移している。

ただし，UTF12は全データやUTF10，11と比べて，使用開始時期が1年～1年半ほど遅くグラフが右にずれている。2012年に高校１年生である回答者では，2008～2009年すなわち中学校入学前後に使い始めた（聞くようになった）者の累積比率が50%を越えている。これは前節で述べた「じゃね？」がどのような人が使うことばであるかの意識に関係していると考えられる。「チャラい人」が使う表現である―比較的乱暴な表現の―「じゃね？」という表現を小学生はあまり使用していない―もしくは，小学生の頃の自分は使うことも聞くこともなかったはずだと考えている―ために，結果が右にずれたものと推察する。

5　「じゃね？」先行語のアクセントの平板化

「じゃね？」先行部の平板化の範囲について，表1の「平板化の範囲」の列に「○」を記したグループを対象に調査を行った。「○^{C}」では「雨降んじゃね？」について調査した。「○^{D}」では「雨降んじゃね？」に加えて「別にいいんじゃね？」「意味ないんじゃね？」「それだと迷惑かけんじゃね？」について調査した。○^{D}で用いた追加の調査文は男子大学生5名に，自分が「じゃね？」を使いそうな場面を想像して例文を作成してもらい，その中からアクセント型と先行文節数を考慮して選定した。表3に提示音声のアクセントパタンを示す。文節の区切りに空白を入れているが，提示した音声ではすべて間を空けずに1文を一息で読んでいる。

表3　平板化の範囲の調査における提示音声のパタン

雨降んじゃね？				
平—平	あ　め	ふ　ん	じゃ　ね	
有—平	あ　め	ふ　ん	じゃ　ね	
有—有	あ　め	ふ　ん	じゃ　ね	
別にいいんじゃね？				
平	べ　つ　に	い　い　ん	じゃ　ね	
有	べ　つ　に	い　い　ん	じゃ　ね	
意味ないんじゃね？				
平—平	い　み	な　い　ん	じゃ　ね	
有—平	い　み	な　い　ん	じゃ　ね	
有—有	い　み	な　い　ん	じゃ　ね	
それだと迷惑かけんじゃね？				
平—平—平	そ　れ　だ　と	め　い　わ　く	か　け　ん	じゃ　ね
有—平—平	そ　れ　だ　と	め　い　わ　く	か　け　ん	じゃ　ね
有—有—平	そ　れ　だ　と	め　い　わ　く	か　け　ん	じゃ　ね
有—有—有	そ　れ　だ　と	め　い　わ　く	か　け　ん	じゃ　ね

5.1　「雨降んじゃね？」

調査対象の全グループに対して実施した「雨降んじゃね？」の結果を図4に示す。はじめに全体（ALL）を示し，それ以下は先行文節をまったく平板化させない「有—有」を選んだ割合が高い順に並べ替えた。全体では90%以上が少なくとも直前音1文節を平板化すると答えた。また，若年層では，SIZ09（静岡市の大学生）とOTR10（小樽市の大学生）を除いた若年層グループの結果はすべて90%を越えており，「じゃね？」先行部を平板化する言い方は若年層に広く使用（または許容）されているといえる。NAS09（那須塩原の成人層）では「じゃね？」先行部を平板化しない「有—有」の回答が約44%であり，先行部すべてを平板化する「平—平」も同様に約44%であった。他のグループと比べて，部分的に平板化させる「有—平」のパタンが選択される割合が低い。NAS09のうち無アクセント話者は若者が使用する「じゃね？」先行部の平板化ではなく，無アクセント方言の発音としての「平—平」を選び，NAS09のうち共通語アクセントを使用する話者は先行文節を平板化させないため「有—有」を選んだという結果が表れているものと考えられる。

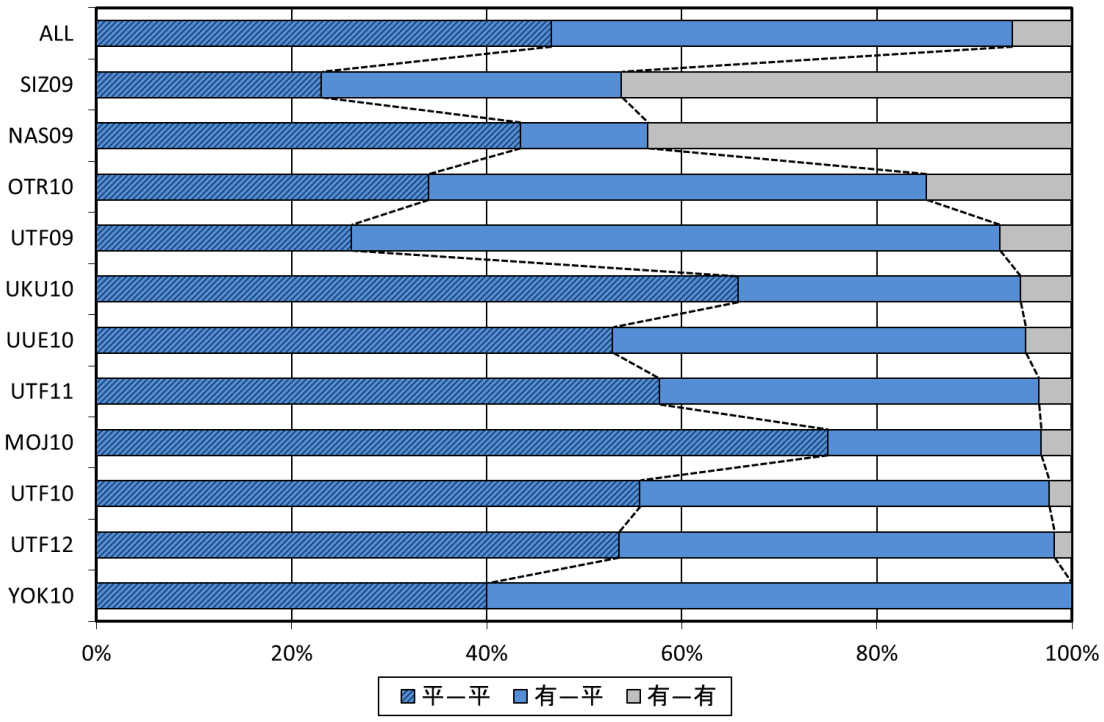


図4　平板化の範囲の調査における提示音声のパタン

5.2　　平板化の適用範囲

「雨降んじゃね？」に加えて，「じゃね？」先行部文節（アクセント句）の数が異なる「別にいいんじゃね？」「意味ないんじゃね？」「それだと迷惑かけんじゃね？」の3種類の調査文を用意した。「別に良いんじゃね？」は「じゃね？」の先行部分が2文節であるが，「別に」がHで終わり「いいん」がHで始まるため，「別にいいん」を1つのアクセント句として扱った。「意味ないんじゃね？」は「意味」と「ないん」の2カ所，「それだと迷惑かけんじゃね？」は「それだと」「迷惑」「かけん」の3カ所にそれぞれアクセント核があり，平板化する可能性をある。表3に示したピッチパタンの音声を提示し，回答者には「自分の言い方（または，自分がよく聞く表現）はどれに近いか」を選択してもらった。回答用紙には「どれにもあてはまらない」という選択肢も設定したが，本調査の意図するパラメータ以外の観点で再生した音声が自分の言い方と異なると回答している可能性があるため，分析からは除外している。

調査を行った全グループにおける結果を図5に示す。このグラフはそれぞれの調査文で先行何文節（アクセント句）まで平板化させた音声を選んだかを示している。まず，先行部に平板化し得る部分が2箇所ある「雨降んじゃね？」と「意味ないんじゃね？」を見ると，先行1文節だけを平板化させる「1」と先行2文節すべてを平板化させる「2」がいずれも45%程度ずつ選択されており大きな差はない。Rのprop.test関数を用いて比率の差の検定を行った結果も「雨～」と「意味～」の「1」と「2」の間に有意差はない（$p=0.2291>0.05$）。ただし，「雨～」の方が平板化させない「0」の選択が有意に少ない($p= 3.162e-06<0.05$)。

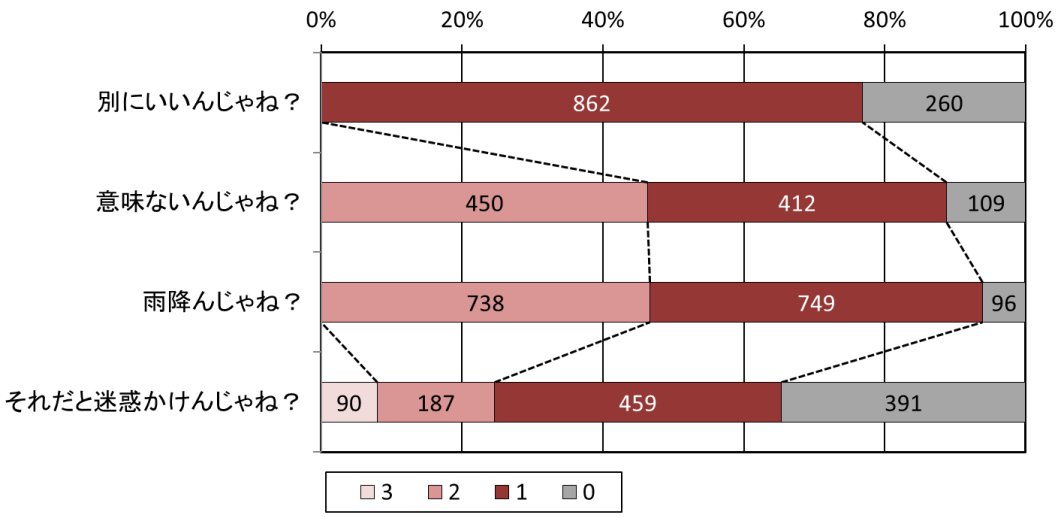


図5 「じゃね？」先行文節数が異なる文の平板化

（凡例の「0」～「3」は平板化する先行文節数を表す）

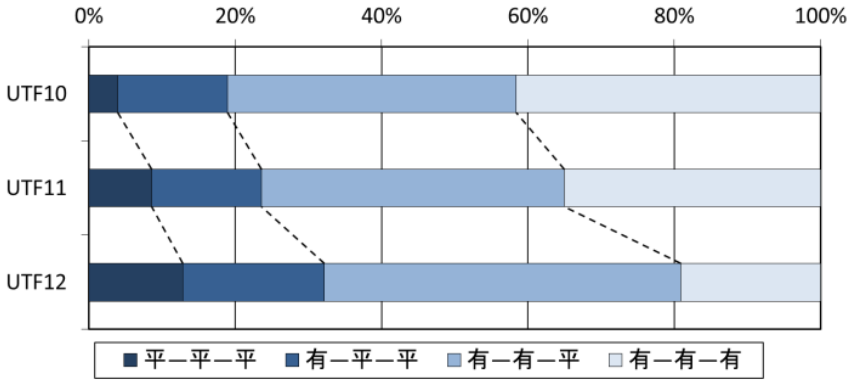


図6 UTF10，11，12における「それだと／迷惑／かけるん／じゃね？」先行部平板化の推移

次に，先行部が1つのアクセント句である「別にいいんじゃね？」を見る。「雨～」や「意味～」と比べて平板化させない「0」が多く選択されていることがグラフから読み取れる。検定の結果も，「意味～」vs「別に～」および「雨～」vs「別に～」で平板させるかどうかの選択について有意差が見られた。（それぞれp= 8.498e-13＜0.05，p= 2.2e-16＜0.05）

先行部の平板化可能箇所が3箇所である「それだと迷惑かけんじゃね？」では，約35%が平板化させない音声を，約40％が先行1文節のみの平板化させた音声を選んだ。また，先行2文節の平板化（約17%）と先行3文節すべての平板化（約8%）は比較的少なかった。「かける」は中高型の動詞であり，頭高型の語よりは平板化しやすいため，最終1文節の平板化は多く選択されたものの，それ以上長い部分に渡る平板化は受け入れられないために「平板化しない」という選択の割合が他の調査文よりも高い結果になったと考えられる。ただし，UTF10～12の結果（図6）を見ると，年を追うごとに平板化の範囲が長い音声を選択する割合が高まる傾向が見られるため，今後調査を進めて分析したい。

平板化の範囲についてまとめると，先行部が2文節の場合は直前1文節の平板化と先行部全体の平板化が同等の割合で選択されるものの，全調査文を通してみると直前1文節のみを平板化する音声がもっともよく選択される。また，先行文節の多い文では，長い文節に渡って平板化するよりも，平板化しない音声が選ばれることが分かった。日常会話の中で「じゃね？」の先行部がかなり長い文節にわたって平板化する例を耳にすることがあるが，今回の調査の範囲ではそのような用法が幅広く使用されているわけではないといえる。

5.3　平板化の適用範囲の対応分析

RのMASSライブラリに収録されているcorresp関数を用いて，UTF10，11，12について，平板化の範囲と回答者の属性（居住地・性別・調査年）の対応分析を行った。この結果を図7に示す。

平板化をさせない音声を選択した「～0」，直前1カ所のみを平板化した音声を選んだ「～1」，2文節以上平板化した音声を選んだ「～2」および「～3」に分けて順に見てみると，性別では「女」より「男」が平板化の範囲が長く，居住地では「県南」「県央」「県北」の順に平板化の範囲が長いことが読み取れる。4.1節で述べた「じゃね？」の使用意識では，県北より県南の方がわずかながら使用率が高かったが，平板化の適用範囲では異なる結果となった。この平板に対する許容の差には無アクセント方言の残存傾向（県北＞県南）が影響している可能性がある。調査年では「2010年」に比べ，「2011年」「2012年」の方が平板化の範囲が長い傾向が見られる。「2012年」は「2011年」より平板化の範囲が短いグループに近づいている。流行から定着の過程との関連については，今後の継続調査によって確認したい。

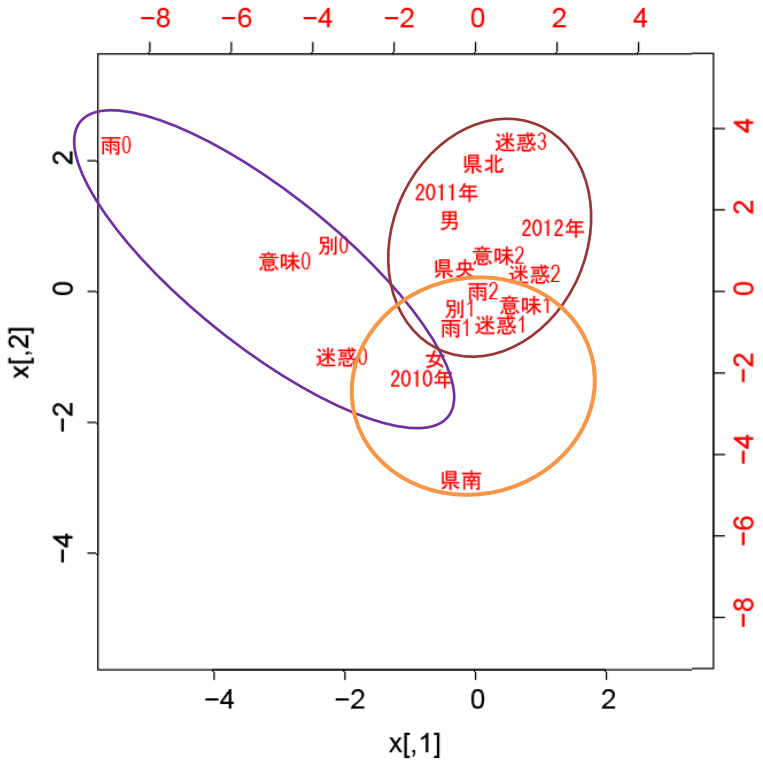


図7 平板化の範囲と回答者属性の対応分析

6　まとめ

本稿では，4年間にわたって栃木県の若年層を中心とする延べ11のグループに対して，アクセントの弁別，「じゃね？」の使用意識，「じゃね？」先行部の平板化の範囲についての調査を実施し，結果について述べた。3種類の調査項目から，概ね共通語アクセントを聞き分ける能力を有している若年層のうちの80%が「じゃね?」を日常会話で使っていることが分かった。また，「雨降んじゃね？」の例では，90%以上が少なくとも直前の1文節を平板に発音することが明らかになった。

使用意識の調査では，「じゃね？」は「身近にいるチャラい若い男性」が使う表現であるという使用者像が浮かび上がったが，自分自身が使用しているという回答は，性別，調査年，居住地にかかわらず80%前後と高かった。また，使用開始時期については，概ね2004～2005年から使う人が増え始め，2009～2010年にはほぼ飽和に近づいた。現在は若年層であれば誰がつかってもおかしくない表現になったと考えられる。「じゃね？」先行部の平板化の範囲については，先行部が2文節の場合には，直前の1文節のみの平板化と2文節すべての平板化の割合はほぼ同等であるが，より長い文を続けて平板化する発音を選んだ回答者は多くなかった。この場合，逆に平板化させない発音を選ぶ割合が増加した。

使用意識では2011年より2012年の方が使用者が減る傾向が見られ，平板化の範囲では2011年より2012年の方が平板化の範囲が短い傾向が見られた。若年層に広く普及した表現の使用状況について継続した調査によってさらに明らかにしていきたい。

また，「じゃね？」先行部の平板化については，文節数だけでなく単語の長さ，アクセントの組み合わせ，文の係り受け構造など考慮すべき点がある。これらを明らかにするためには，調査文を増やして調査を行う必要がある。今後，今回のような規模の回答者に対する使用実態についての継続調査と並行して，調査対象を限定し「じゃね？」先行部の平板化の音声・言語的要因について，より詳細な検討も進めたい。

謝　辞

調査にご協力くださった皆様に感謝いたします。

参考文献

井上史雄(2008a)「ことばの散歩道 123 新方言じゃね」,『日本語学』, Vol.27, No.9, 明治書院.

井上史雄(2008b)「地域語の経済と社会―方言みやげ・グッズとその周辺―第 27 回　古株じゃん　新米じゃね」, Sanseido Word-Wise Web (http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2008/12/13/地域語の経済と社会-第 27 回/).

NHK 放送文化研究所編(2002)『NHK 日本語発音アクセント辞典 CD-ROM 版』, 日本放送出版協会.

木部暢子(2007)「福岡市アクセントの平板化」, 『国文学：解釈と鑑賞』.

儀利古 幹雄(2011)「東京方言におけるアクセントの平板化 ：外来語複合名詞アクセントの記述」『国立国語研究所論集』 (1), 1-19.

小池清治(1982)「現代栃木方言の二，三の問題－自発動詞と東京アクセントの浸透について－」『宇都宮大学教育学部紀要』Vol32, No.1, pp.1-22.

高丸圭一(2010)「無アクセント地域の若年層における「じゃね?」先行語のアクセント―収録による調査と音声を掲示したアンケート調査―」 『明海日本語』, Vol.15, pp.1-10.

田中ゆかり(2009)「「とびはね音調」とは何か」『論集Ⅴ』pp.97-110, アクセント史資料研究会.

早野慎吾(2006)「無アクセントの比較研究:栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較」『地域文化研究』, Vol.1, pp.23-32, 宮崎地域文化研究会.

森下喜一(2004)「方言の特色」『栃木県の言葉』平山輝男編, pp.15-29, 明治書院.